

解 答

一

- 問1 ① 深呼吸 ② 特異 ③ ひとけ
 問2 (1) オ (2) エ
 問3 暖房 問4 教室
 問5 イ 問6 イ
 問7 エ 問8 オ
 問9 好奇心 問10 ア・オ・キ
 問11 信じられな 問12 頭の中の電
 問13 エ 問14 ウ
 問15 A 頭の中 B 実在の人物
 問16 A 繁張感 B 白 C 映画音楽 D 充実感 E 虚構の人物 F 心の底で話

二

- 問1 a のら b 安息 c 台頭
 問2 d ウ e ア
 問3 あったのです
 問4 もし十 問5 春分・秋分
 問6 エ
 問7 ア 不定期法 イ 定時法
 問8 利子禁止法
 問9 ア 神 イ お金 ウ 商人 エ 時が金
 問10 B エ C ア D イ E ウ F エ
 問11 エ
 問12 時間を惜しんで仕事にはげむ

解 説

記号選択肢（16題）と、ぬき出し（23題）の設問数が多いのが特徴です。文章は難し目で読み取りにくいいものが出題されています。今後もこの傾向は続くでしょう。どんな文章を与えられても、初見の読み取りで文章の方向（論理の展開、心情の変化等）を見抜いていくことに努めましょう。文章が見えていれば、設問の処理に手間取らないはずです。得点力を上げるために、難し目の文章から逃げずに、エネルギーッシュに文章の中に自分から入っていき、しかし頭は冷静に論理的に、速く正確に読み取る力を持つていく練習を日頃から積んでおくことが必要です。また、読書なども含め、日頃の言葉の学習を充実させて、語彙を増やしておく必要があります。以上にあげたこと全てを総合して、レベルの高い読解力を身につけていくことで、国語の合格点獲得を実現できるはずです。

一

- 問1 (漢字の書き取り・読み)
 問2 (記号選択・慣用句)
 問3 (ぬき出し・季節) 季節に関わる表現には普段から敏感になります。「暖房」がついているので冬です。
 問4 (ぬき出し・適語) 文章の終わりの方に、「教室」という単語が出てきます。
 問5 (記号選択・心情説明) 携帯電話で話をしているということは、話す相手としての友達がいるということです。「わたし」は、そういう状況にあこがれを抱いているようです。また、「心の底で話し相手を欲しがっていた」という文章後半の表現からも、現実の「わたし」には友達も携帯電話も無いと考えられます。
 問6 (記号選択・表現説明) 自分の頭の中で、携帯電話を持っていることを想像しています。その携帯電話の着信音と同じメロディーが鳴りはじめたのです。自分の想像の中の携帯電話は、未知の相手からの着信ということになります。それを思わせるメロディーだったということです。
 問7 (記号選択・人物様子) どうやら、着信音は、自分の頭の中の携帯電話のものであると気づいたのです。傍線3の直後の文に、「おそるおそる」と、また、3行後に「恐怖に近いものを感じた」と心情が述べられています。
 問8 (空所補充・記号・適語) 電話の相手が誰かはわからないのです。当然、どんな内容かもわかりません。ただ、携帯電話に電話がかかってきたという事実があるのです。
 問9 (空所補充・ぬき出し・適語) 野崎シンヤという携帯電話の相手が、名前を名乗った後で、なぜ電話をかけてき

たのか説明していますね。その部分に、「好奇心から電話をかけてみたのだ」とあります。そこで、相手も「わたし」と同じ気持ちでいたことがわかります。

問10 (記号選択・心情理由) 頭の中の携帯電話で非現実的な電話のやりとりをしているし、見ず知らずの人といきなり話をしているのですから、「いたずら」もなにもないのですが、やけに「いたずら」っぽくも聞こえますね……?

問11 (ぬき出し・言動) 問題に、「言葉の発し方」とある点に着目します。傍線5「頭の電話に語りかける」は、声を出さずに、頭の中で、想像しながらおずおずと語りかけています。つまり、声は出ていないのです。しかし、実際に声を出して、つぶやいているところがありますね。「信じられない……」がそれにあたります。

問12 (ぬき出し・同内容) 「あまりに存在感がある」と同内容は、「何よりもリアルな存在になっていた」ですね。電話をとらないでいるわけにはいかないと、おそるおそる電話にでる前に説明があります。

問13 (空所補充・記号・該当の内容) 「わたし」が、頭の中の電話の相手の人と同じ考え方、気持ちでいるということがわかったところです。相手も、自分と同じように、「携帯電話を想像の中で使いたがっている」変な人間だとわかったのです。

問14 (記号選択・心情理由) 傍線7の次の行に、「混乱させられてもいた」とあることに着目します。なぜ「混乱させられてもいた」かは、この物語上の事実を正確にふまえることで、解決します。見知らぬ相手と話をしたのですね。

問15 (ぬき出し・適語) 傍線8の前の3行の内容をまとめると、「シンヤ」という人物が、「わたし」が勝手に頭の中で創り出してしまった虚構の人物であるという考えです。傍線8の内容では、それとは逆に、「シンヤ」が実在する人物だと考えます。

問16 (ぬき出し・適語) 文章の中程から終わりにかけて、「わたし」の心の状態(緊張感、充実感)、対立要素(実在の人物、虚構の人物)、考え(心の底で話し相手をほしがっていた)などをつかみつつ、あてはめていきます。

二

問1 (漢字の読み・書き取り)

問2 (語句の意味用法)

問3 (ぬき出し・脱文) 設問に、「句読点等は字数に含めない。以下同じ」とあるので、注意しましょう。脱文の、「このようにしてつくられたのが」に着目します。どのようにしてつくられたかを考えます。「職人たちが精魂をかたむけて、良い作品をつくろうとしてつくった……」と考えるのが自然ですね。つまり、「良い作品をつくる」ことを「目的」として、つくられた作品、→「このようにしてつくられたのが……」と脱文につながります。

問4 (ぬき出し・具体的説明部分) 十二時を過ぎたら、具体的にどうなるのかが書いてある部分をさがします。

問5 (適語・季節) 年に二度ある昼と夜の一時間の長さが同じ日のことを「春分」「秋分」と言います。

問6 (記号選択・接続語の説明) 逆接の語が入ります。Aの前では、自然の時間についての説明がありますね。そして、Aの後で、機械時計がつくる時間についての説明となっていて、内容が対立(逆接)しています。

問7 (ぬき出し・該当の内容) 自然の時間と人工の時間の対立要素の説明内容を読み取ることで解決しますね。自然の時間は「不定時法」と、人工の時間は「定時法」と呼ぶと説明がありますね。

問8 (ぬき出し・該当の語) 神の時間とは自然の時間のことですね。教会の示した考えは、「利子」は神のものである「時間」を盗んだ結果うみだされたものであるという理論です。神のものを盗むのですから、道徳的にゆるされない行為であるということになりますね。そこで、「利子禁止法」を制定しました。

問9 (ぬき出し・適語) 時間は神のものであるとキリスト教会は主張していましたが、それに対立する形で商人たちによって時間が支配され、時間がお金を使うという現実が生み出されていきます。

問10 (空所補充・記号・適語) 空欄B～Fのある形式段落は、何について書いてあるかを考えます。「機械時計のつくる」や「近代的抽象的時間」とあることから、「商人の時間」について、前の形式段落の内容を受けて説明が続いていると考えられます。

問11 (記号選択・該当の内容) 十七世紀後半のイギリスのリチャード・バクスターという人の説いた考え方には、人びとの関心をあつめる新しい時代の生きかたが説明されていますね。その中に、「時間を惜しんで仕事にはげむ」という「勤勉の徳」を説いていたとあります。

問12 (ぬき出し・適語・筆者の考え方) 筆者は、シンデレラと魔法つかいとの時間の約束に関して、新しい時代の社会的背景があったと説明しています。そこで人びとの関心をあつめた新しい時代の生き方の説明は、イギリスのリチャード・バクスターという人の説いた考え方の中にあると考えられます。前問と同じく、「時間を惜しんで仕事にはげむ」という勤勉の徳を用いるのが適切でしょう。